

改訂新版

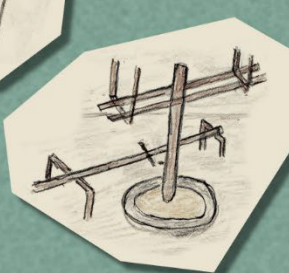
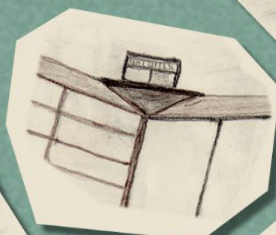
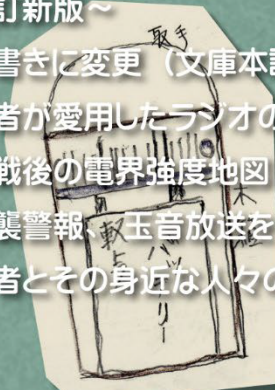
S-16

85年の田舎暮らしの日々を綴る

老人とラジオ

～改訂新版～

- 縦書きに変更（文庫本調）
- 筆者が愛用したラジオの写真
- 終戦後の電界強度地図（近畿）
- 空襲警報・玉音放送を詳しく解説
- 著者とその身近な人々の写真



西田武司

radio 1 ban

初版

2018年12月吉日

改訂新版

2024年6月20日

知的電子実験～ラジオのある風景

ISBN 978-4-907167-16-5

「空襲警報」

「ビーーーーー 警戒警報 中部軍情報 十四時四十分現在 敵の第一梯団二十二機は 高野山付近を経て 北に進んでおります ただ今時刻は一四時四四分半であります 以上」

「ビーーーーー 中部軍情報 敵梯団は 間もなく大阪に来るものと思われます 以上」

「うわわあっ・・・」

飛び起きた。ビックリした。一気に目が覚めた。

2015年8月15日（土） 早朝4時過ぎ。

鳴らせっぱなしにしている寢床ラジオから流れて来た「空襲警報」だった。NHK関西発ラジオ深夜便「明日への言葉」だ。

高野山、大阪、潮岬、神戸、田辺、和歌山、熊野灘と馴染みの地名が次々と流れてくる。

戦後世代の私（編集者）にとって初めて聴く本物。正直とても興奮した。頭に「空襲警報」と言わなかったのが不思議だった。「防空情報」「警戒警報」「空襲警報」と段階がある事を、後になって知った。

この放送を同じ時刻に、筆者武司も聴いていたらしい。筆者武司（父）とは確執があり、ずっと殺伐とした関係だが、この「空襲警報」の話題では珍しく盛り上がった。筆者武司と悦子（母）と三人で、酒を飲みながら、当時を回想して貰った

南方（おそらく南方へ向かう輸送船の中）で戦死した悦子の父。徴兵検査で、聴力に問題があり徴兵を逃れた筆者武司の父。広島砲兵で、「（広島原爆）伏せろ！」の号令により、九死に一生を得た叔父。

私が幼かった頃、大人から戦時中や戦後の話をよく聞かされた。日本を焼き尽くし、多くの日本人の命を奪った、憎むべき「ベイグン」に対して、なぜか？憎悪や悪口を口にする大人は誰もいなかった。米軍（ベイグン）Ⅱアメリカ軍という言葉覚えてたのもこの頃だった。物事の善悪も未だ解っていない私にとっては、ずっと不思議でならなかった。筆者武司なんぞは「大きなパイプをくわえて降りて来たマッカーサーは、とてもカッコ良かった」（ニュース映画で見たのだろう）とさえ言い切っていた。

幼い頃、台風はとても怖いものだった。当時の白黒テレビ受像機は、台風が来ると必ず「大阪管区気象台」が出て来て、やたら細かい経緯度線の天気図を映している。そして「室戸レーダーによりますと・・・」と、オドロオドロしたレントゲン写真のような気象レーダー画像が映し出されて来る。不気味の極み。震え上がる。

そこに、「米軍機が台風の目に突っ込みました」とアナウンサーは言う。

「エッ・・・??」「ベイグンキって敵機じゃないの?」「あんなこわい台風の目に突っ込むって、もしかして正義の味方??」

そうして一少年が抱いた謎は、日米安保闘争が収束する時代あたりまで謎のまま。

こうした幼い頃ずっと抱き続けた謎を、大人になり、沖縄米軍の親友を持った現在、当時の謎を少しでも理解した

いと思い、筆者武司に「老人とラジオ」の執筆をお願いした。これが発刊のきっかけである。

筆者武司は2020年2月に89歳で他界。武司の妻悦子は2024年4月に87歳で他界。二人とも一生を和歌山県伊都郡かつらぎ町で終えた。肺癌と狭心症など、“入院のデパート”みたいな父だったが、コロナ感染では無く、いわゆる「ボックリ」。母は老衰、花が枯れていくように静かにこの世を去った。

筆者武司から教えてくれた最高の言葉は

「先ず健康」

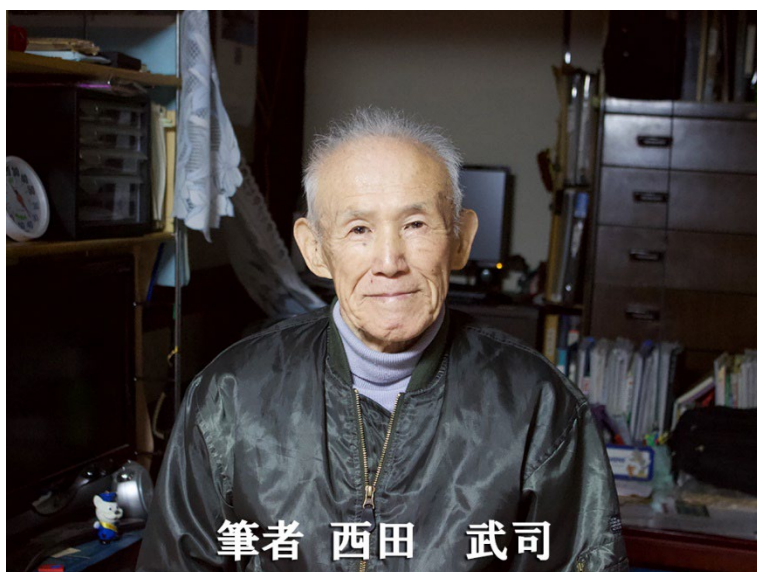
「感謝」

父母に感謝。

2024年6月

編集者 西田 和生

※ 改訂新版の冒頭タイトルを「空襲警報」としましたが、「老人とラジオ」発刊のきっかけをお話したかったのです。空襲警報、警戒警報、防空情報と、当時の放送について詳しく知りたい方は、録音が「NHKアーカイブス」に保管されているようなので探してみてください。また、岩波新書「幻の声 NHK広島8月6日」白井久夫著に詳しい解説があります。編集者は、2015年と2016年に再放送されたNHKラジオ深夜便を録音した音声から引用しました。



目次

「空襲警報」	2
目次	6
改訂新版 はしがき	0
はじめに（初版）	1
著者が愛用したラジオ達	3
放送局型123号ラジオ受信機（戦時許容型）	4
ビクター 7TA-5 7石スーパートランジスタラジオ	6
東芝 かなりやQ 5球スーパー真空管ラジオ	8
東芝 IC-70 IC+FET+5石 FM/AMラジオ	9
昭和50年以降一人一台の時代ポケットラジオ	1
東芝 6TC-485 時計付トラベルラジオ	2
著者とその身近な人々	3
著者が聴いていた地域の電界強度地図（昭和24年）	5
一 紀の川のジャコとり	6

二	空襲警報	2
三	部屋片付け	3
五	太平洋戦争開戦日	3
六	改造ラジオ	3
七	終戦前後芋づくりの手伝い	3
八	終戦前後サツマイモ作り	4
九	終戦後の通学	4
一〇	四国まいり	4
十一	川止め	4
十二	怖い話	4
十三	台風(室戸台風)	5
十四	亥の子餅(いのこもち)	5
十五	戦時中のラジオ修理	5
十六	肺癌	5
十六の二	夜が恐い!??癒しのラジオ	5
十七	湧き水の棚田(沼田)米作り	6
十八	不便な場所の脱穀	6
十九	ド素人の牛使い	6
二十	終戦前後の食糧難	7

二十一	終戦の思い出(玉音放送)	73
二十一の二	ラジオのある風景〜終戦〜玉音放送〜(編集者筆)	75
■	「玉音放送」の予告	76
■	「玉音放送」の内容	77
二十二	土臼で粃摺(もみすり)	80
二十三	田植えの準備	83
二十四	用水の番水制度	85
二十五	薪取り	87
二十六	足で揉む番茶	89
二十七	溜池の魚	92
二十八	紀の川 エビ抄い	94
二十九	水車で米搗(つき)	96
三十	大峯山登り	98
三十一	池のエビ採り	101
三十二	足踏み臼	103
三十三	ゴリ押し	105
三十四	杉の木の枝打	107
三十五	キウイフルーツの灌水(かんすい)	109
三十六	紀の川の増水(第二室戸台風)	111

三十七	子供から見た養蚕	1
三十八	夕方 川辺の酒盛	1
三十九	濁酒の花見	1
四十	溜池の土砂出し	1
四十一	麦餅	2
四十二	西国まいり 槇尾山	2
四十三	同級会（最終。八十五才）	2
あとがき		8

改訂新版 はしがき

■本書は、筆者が書いた順番通りに掲載しています。「しおり」や「目次」を使って興味ある内容にジャンプしてください。

「radioIbanのマニュアル全集」に本書を加えるに当たり、内容の加筆、写真画像の追加、再び本文の精査と編集を行いました。

- ・著者が愛用したラジオの写真画像を追加
- ・終戦後の電界強度地図(近畿地方)を追加
- ・著者とその身近な人々の写真を追加
- ・手書き原稿から、どうしても判別できない文字は、やむなく「●」としました

改訂新版から、時代考証と読みやすさを考慮して、縦書き(文庫本調)に変更しました。

PDF形式(B5縦116ページ)と、Kindle形式(116ページ)

※PDF形式とKindle形式は、写真画像の配置などレイアウトが異なります。

編集 西田 和生

発行 radioIban(ラジオ一番)

発行日 2024年6月20日

はじめに（初版）

「ラジオのある風景」シリーズ第1弾。

和歌山県の田舎町に暮らす老人が、ラジオとの、ほのかな付き合いを語りました。戦中戦後の時代を、ラジオと共に生き抜いた物語があります。ラジオ受信機が社会の主役だった時代に、田舎で農業を営む著者が、ラジオと関わった人生を書いたものです。田舎生活の歳時記です。本人はラジオ技術者ではありません。筆者は昭和一桁生まれです。お話は戦前、戦時中、戦後、そしてちよつと昔の昭和までの実際にあつた経験を、43のトピックに分けて書いています。

旧字体漢字など、現在では使われない漢字には、編集時にできる限り〇内にふりがなを挿入しました。難解な方言（著者は和歌山県在住で紀州弁）にも簡単な解説を加えています。言い回しや言葉遣いについては、現在風に編集しすぎると、老人本が書いたオリジナリティを損ねると考え、原文のままにしています。読み辛い点はどうぞご容赦ください。

「老人とラジオ」は、radioIban.com“知的電子実験くラジオのある風景”記事に、大幅に加筆したものを電子書籍化したものです。

2018年12月吉日

著者 西田 武司
編集 西田 和生

原稿起こし・編集 宮本 梨菜

デザイン 嘉賀 幸子

発行 radio1ban(ラジオ一番)

WEBサイト <https://radio1ban.com>

ビクター 7TA-5 7石スーパートランジスタラジオ

MW:535~1605kc SW:3.9~10MC

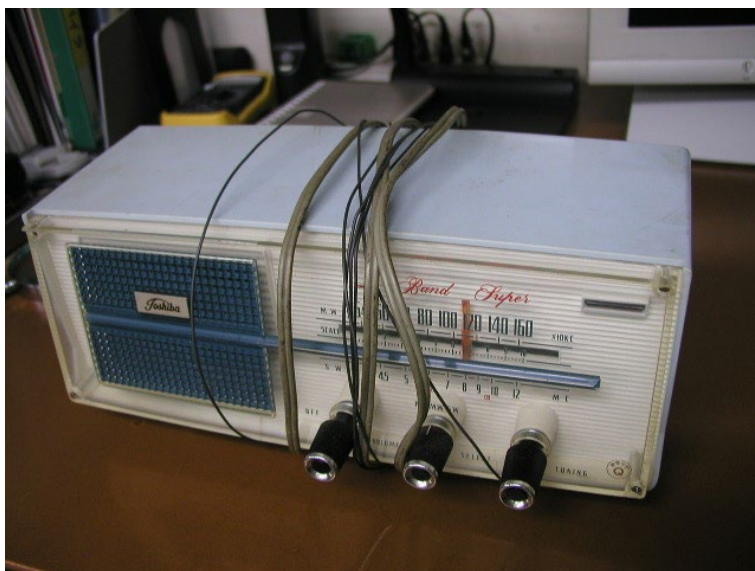
昭和35年から40年代前半頃まで、白黒テレビが一家に一台の時代。畑、家内作業、納戸(寝室)、あらゆる場所で大活躍した。



東芝　かなりやQ　5球スーパー真空管ラジオ

筆者の弟が大学時代に愛用した真空管ラジオ。実家に残して行つたこの“かなりやQ”は、結局、編集者がバラバラに分解してしまった。後に編集者の、真空管ラジオ整備の原点となる。

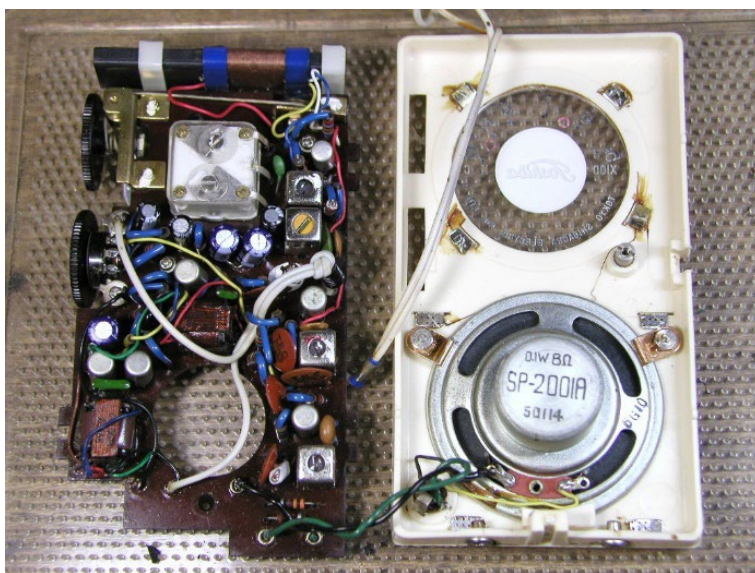
トランスレスラジオ　12BE6　12BA6　12AV6　30A5　35W4

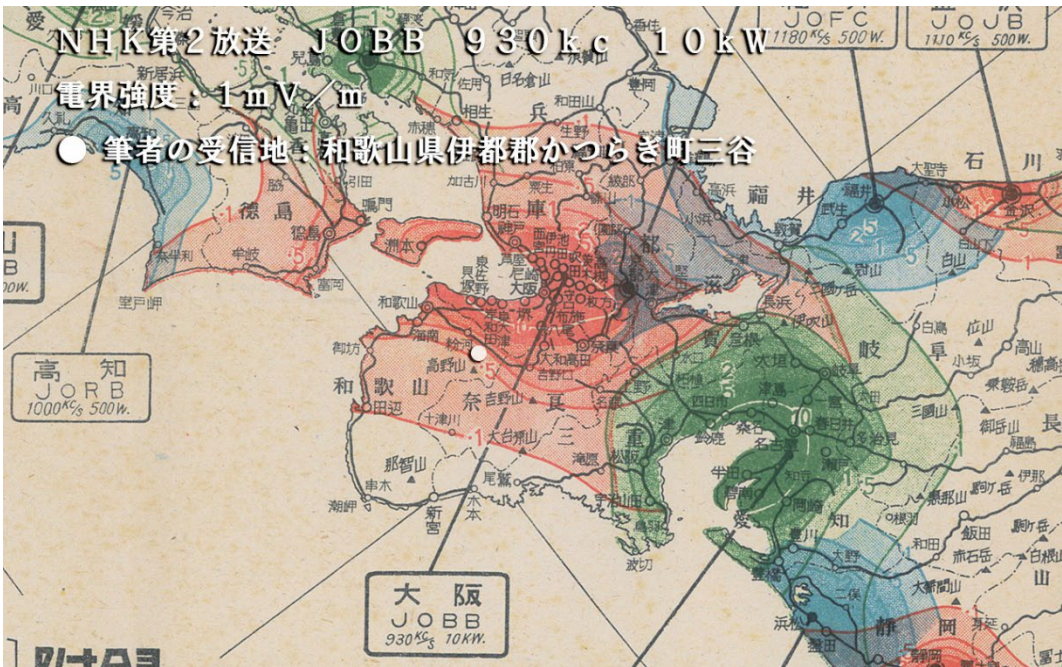
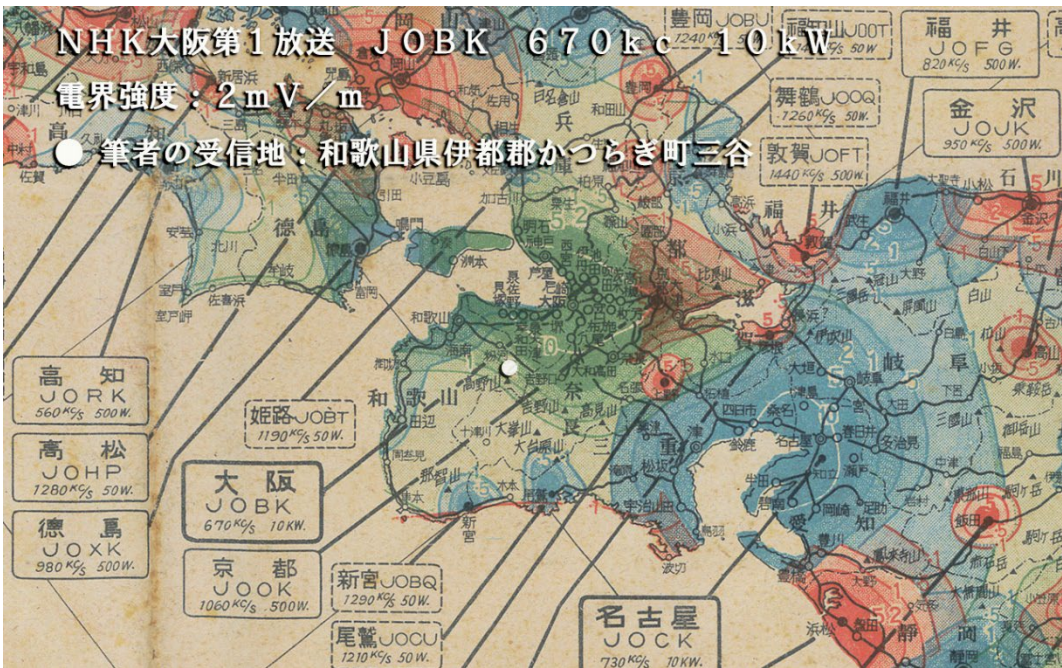


東芝 6TC-485 時計付トラベルラジオ

昭和38年。旅行好きな筆者の父が愛用したトランジスタラジオ。

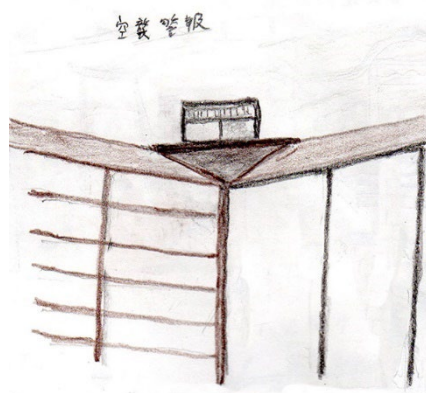
旅のお供。普段は大事にタンスに仕舞い、決して畑仕事には持って行かなかった。孫である編集者にも触らせる事は一切無かった。
分解写真は、不良トランジスタ交換、電解コンデンサ交換後の様子





※“ラジオ技術”1月号「第3巻
第1号」付録 日本放送協会提
供 電界強度地図から抜粋引用

二 空襲警報

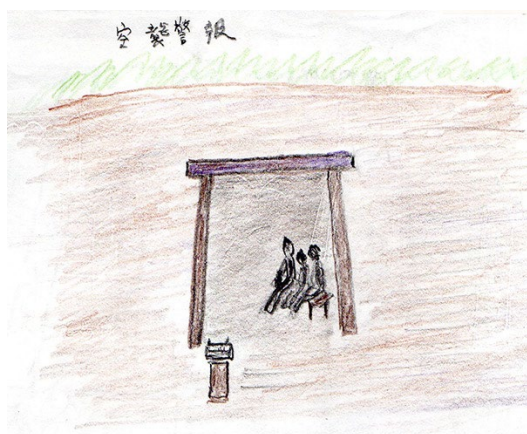


今日も夕方から警戒警報発令中で、家の中の電球は黒布で被われ、窓に黒いカーテンが引かれている。その内に一台のラジオは、隅の棚の上から空襲警報発令を知らせ、敵機B-29爆撃機の編隊が南方洋上より和歌山市方面に向かっている。

半分ほど開けて、家族は皆外へ出て防空壕へ入る。すると近所の人達も続いて入り、口々に焼夷弾がどうか、爆弾は道とか、想像で色々しゃべっている。

約半時間位経った時親父が「お前等いっぺん出て来て西の空を見てみい！」と叫んだので、皆外へ出て見ると、真っ赤に赤く明るい空。相当大きな爆撃だつた様だ。又それぞれの話で賑やかだ。ふと我に返ると空腹を感じている。誰も同じで「腹減ったなあ」と声が出た。

その頃は現在と違って「欲しがりません勝つまでは」と、農家でも米は勿



四十三 同級会（最終） 八十五才

私は昭和十六年度小学校卒業生（四十五名）の同級会について、昨年の開催は、順番で私と友人が準備するようになっていました。友人と話して「集まる人も少ないしもう止める」と話しましたが、前回からの記録と残金二万余り預かつてであると。

それでは仕方無いので、連絡内容は、今回は、電話連絡と、同窓会は今回で終りにすると、会場会費開催日決めで出席できそうな人十七名へ、二人で手分けして連絡して、出席者は男六名、女三名と決まりました。

開催日三月三十日（編集注：なぜか筆者の誕生日）、当日会場の自家用バスで送迎。十一時開会。

出席者九名の共通している事は、明るい笑顔が良い。始めから終りまで、ワッハッハハ大声で笑いが止まらない。一人ずつ話しても、誰もが兎に角朗らかで暗い話は出てこない。家庭のことも話してくれるが、若い人、嫁さんも含めて、孫まで優しいとか、お嫁さんを褒める等、世間でよく聞くプラスの言葉ばかり。マイナスの言葉は聞こえなかった。

人には表現の仕方が違っても、他人の悪口や比較したりする事はない。ただ長生きしてる人は、同級生の中にも多数いるが施設に入っている人、病院にいる人、認知の人等々色々いるが、健康的に長生きしている人は、とにかく一口に言つて、明るく、物事に大らかで、あまり心配しないようだ。

同じ長生きするには、精神も大きく関与していることを考へて、明るく優しく楽しく、感謝の心で健康的に長生きしよう。私は今まで肺癌も患い入院も何回かわからないが、現在はお医者さんが、心臓も肺も少し：と云うが、自分は大丈夫と思いがけを付けている。

兎に角、明るく生きて行こう。

同級会



あとがき

筆者武司と編集者、父子の関係には確執があり、「老人とラジオ」刊行後は全く放置状態でした。技術マニュアルに重点を置いており、一老人の書いた手記なんぞ・・・と勝手な思いで・・・

2024年6月、radiobanマニュアル全集に、「老人とラジオ PDF版」を加える為に、5年6ヶ月ぶりに初めて、Amazon 電子出版KDP(kindle direct publishing)のレポートを見て驚きました。多くの方に読んで貰っている。Amazon Kindleでは読み放題(Kindle Unlimited)に設定しているが、最後まで読んでいただいた読者も結構おられる。感謝。

老人が手書きで書いた読み辛い原稿を、根気良くテキスト入力してくれた彼女。Kindle出版までデザインやイラスト、そして校正と、Kindle出版を手伝ってくれた仲間達にも申し訳無く思いました。

父母の死後、改めて読み返してみると、相変わらず読み辛い文章の中から、戦争を乗り越えて、懸命に生き抜いて来た姿が少し見えてきた気がしました。

筆者武司は、昭和五年、封建的な農家の六人兄弟の長男として生まれ、父母、祖父母、粗祖父母、病氣療養の姪、多くの親戚など大家族を支える為、教師になる夢をあきらめて、生業の農業に一生を捧げました。

時々、子どもが駄駄をこねるように不機嫌になり、その度に閉口しました。今から想えば、大人数の家族を支える重責に、犠牲にならざるを得なかった自分に我慢ができなかったんだろうと思えます。

このような希薄な愛情関係の家庭に生まれ育った編集者ですが、とてもとても大切な事を教えてくれた事を、父母の死後に改めて「老人とラジオ」を読み返して気付きました。

「先ず健康」

「感謝」

「お父ちゃん、死ぬ前になあ、『ビール飲みたいなあ』って言うとしたで」と母の言葉、これが唯一の心残りです。あの世に行ってから再会して、美味しいビールで乾杯して、また「空襲警報」「マッカーサー」の話をしたいと思っています。



晩年の筆者